

研究主題

第10回 東京都公立幼稚園5歳児の運動能力に関する調査研究

目次

I	調査研究の概要	104
1	調査研究の経緯	104
2	調査研究の目的	104
3	調査研究の内容及び方法	104
II	調査結果	105
1	平成19年度東京都公立幼稚園5歳児の運動能力調査結果一覧	105
2	運動能力調査結果における有意差検定の結果	105
III	調査結果の分析	106
1	種目別調査の結果と分析	106
2	補助調査の結果と分析	114
IV	調査研究のまとめと今後の課題	117
1	調査研究のまとめ	117
2	「運動遊び」の充実に向けて	118
3	今後の課題	118
○	種目別調査結果の推移	119
○	調査実施園	122

＜研究の成果と活用＞

1 東京都公立幼稚園5歳児の運動能力の傾向を示したこと

東京都公立幼稚園に在籍する5歳児2,400人を対象とした運動能力調査を実施し、過去の調査結果と比較分析することで、園児の運動能力の傾向を明らかにした。

2 園児の運動遊びや健康・体力づくり等に関する取組事例を示したこと

調査実施園65園に運動能力調査と併せて補助調査を実施し、園児の運動遊びや健康・体力づくりにかかわる指導・援助等の状況や取組事例を示した。

各幼稚園において、運動能力調査と補助調査の結果を活用することで、園児の運動遊びや健康・体力づくりにかかわる指導・援助等の工夫・改善につなげることができるとともに、幼稚園教育の充実を図るための研究・研修に役立てることができる。

I 調査研究の概要

1 調査研究の経緯

昭和 50 年代前半、都市化の影響から運動機能の発達が十分でなかったり、遊びに意欲的に取り組めなかったりする幼児の増加が問題視されるようになった。東京都教育委員会では幼稚園教育を推進する上で、園児の運動能力の実態をとらえることが重要であると考え、昭和 55 年度から 3 年ごとに東京都公立幼稚園に在園する 5 歳児を対象に運動能力調査を実施してきた。また、平成 13 年度からは小学校教育との接続や連携の観点から引き続き調査を行っている。

特に、幼児の育ちについては、基本的な生活習慣の欠如、自制心や耐性の不足、食生活の乱れ、運動能力の低下、小学校生活にうまく適応できない等の課題が指摘されており、現在、国は子供を取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の充実に向けた総合的な施策を進めている。このような状況の中、本調査研究は園児の心身の健やかな成長を増進し、生涯にわたる人間形成の基礎を培う教育の充実を図る上での基礎資料の提供を目的として実施している。

2 調査研究の目的

本調査研究は、過去 9 回の調査結果と比較して園児の運動能力の傾向を明らかにするとともに、調査実施園に対して運動能力に関する補助調査を実施し、運動遊びや健康・体力づくりにかかわる指導・援助の工夫等について調査することにより、幼稚園教育の充実に資する資料の提供を行うことが目的である。

3 調査研究の内容及び方法

(1) 運動能力調査の準備

調査実施園 65 園を対象に実施説明会を行い、運動能力調査及び運動能力に関する補助調査の依頼を行った。

(2) 運動能力調査期間

平成 19 年 10 月から 11 月までの 2 か月の間の連続する 2 週間で実施した。

(3) 運動能力調査等の内容及び方法

①運動能力調査

ア 25m 走(主として敏捷性、瞬発力)

30m の直走路を走り、スタートから 25m の地点を通過したときの時間を測定する。

イ 立ち幅跳び(主として瞬発力)

両足同時に踏み切って跳び、踏み切り線と着地した地点との最短距離を測定する。

ウ ソフトボール投げ(主として瞬発力、調整力)

助走を行わずにボールを投げ、制限ライン(投球するライン)と落下地点の距離を測定する。

エ 体支持持続時間(主として筋力、持久力)

2 つの巧技台の間に立ち両手を巧技台について、体を浮かし、体を支えられる時間を測定する。

オ 両足連続跳び越し(主として調整力、敏捷性)

4m 50 cm の間に置かれた 10 個の積み木を両足で同時に跳ぶ時間を測定する。

②運動能力に関する補助調査

園児の運動遊びや指導・援助の工夫等について補助調査を実施する。

(4) 調査対象園児〔平成19年5月1日現在 公立学校統計調査より〕

都内全公立幼稚園のうち調査協力園65園に在籍する5歳児2,400人

(都内全公立幼稚園のうち休園を除く214園に在籍する5歳児7,007人の34.2%)

II 調査結果

1 平成19年度東京都公立幼稚園5歳児の運動能力調査結果一覧

次の表に示す5種目について調査を行った。

表1

年齢	性別	種目	25m走(秒)		立ち幅跳び(cm)		ソフトボール投げ(m)		体支持持続時間(秒)		両足連続跳び越し(秒)	
		人数	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
年齢区分A	男児	506	6.5	1.0	103.1	19.4	5.7	2.6	40.3	31.7	5.8	1.6
	女児	476	6.5	0.6	97.3	17.0	3.9	1.4	45.2	33.8	5.6	1.2
	合計	982	6.5	0.8	100.3	18.5	4.8	2.3	42.7	32.8	5.7	1.4
年齢区分B	男児	723	6.2	0.6	110.5	19.8	6.7	2.7	50.9	36.4	5.4	1.3
	女児	695	6.4	0.6	100.6	17.7	4.6	1.7	50.1	40.4	5.4	1.2
	合計	1418	6.3	0.6	105.6	19.5	5.7	2.5	50.5	38.4	5.4	1.3
全体	男児	1229	6.3	0.8	107.5	20.0	6.3	2.7	46.6	34.9	5.6	1.5
	女児	1171	6.4	0.6	99.3	17.5	4.3	1.7	48.1	37.9	5.5	1.2
	合計	2400	6.4	0.7	103.5	19.2	5.3	2.5	47.3	36.4	5.5	1.3

※年齢区分A…5歳6ヶ月～5歳11ヶ月 年齢区分B…6歳0ヶ月～6歳5ヶ月

2 運動能力調査結果における有意差検定の結果

5種目について、男女間及び年齢区分間の有意差検定を行った。

表2

比較した項目 \ 種目	25m走	立ち幅跳び	ソフトボール投げ	体支持持続時間	両足連続跳び越し
年齢区分Aの男女間	×	○	○	○	○
年齢区分Bの男女間	○	○	○	×	×
男児の年齢区分A B間	○	○	○	○	○
女児の年齢区分A B間	○	○	○	○	○

(有意水準5%で ○有意差あり ×有意差なし)

男女間、年齢間で平均値同士に偶然とはいえない差があるかどうかを検定した。有意差ありとは、95%の確率で平均値に差があることである。「(年齢区分Aの男女間) 25m走」「(年齢区分Bの男女間) 体支持持続時間」「(年齢区分Bの男女間) 両足連続跳び越し」では、有意差は認められなかった。また、年齢区分間では、5種目すべてにおいて有意差は認められた。

《標準偏差》

資料の各値とその平均値との隔たりを表す量を偏差といい、偏差の平方の平均を分散という。さらに、分散の平方根を標準偏差という。標準偏差は平均の周りにおける資料の散らばりの度合いを数量的に表す量である。

Ⅲ 調査結果の分析

1 種目別調査の結果と分析

(1) 25m走

＜調査結果の概要＞

年齢区分 A では平均値が男児は 6.5 秒、女児は 6.5 秒である。年齢区分 B では平均値が男児は 6.2 秒、女児が 6.4 秒である。全体の平均では男児が 6.3 秒、女児が 6.4 秒である。（表 3）

表 3

年 度	性 別	年 齢		年 齢 区 分 A (5 歳 6 ヶ 月 ～ 5 歳 11 ヶ 月)						年 齢 区 分 B (6 歳 0 ヶ 月 ～ 6 歳 5 ヶ 月)						全 体		
		項 目	年 齢	平 均	標 準	変 動	最 高 値	最 低 値		平 均	標 準	変 動	最 高 値	最 低 値		平 均	標 準	変 動
				(秒)	偏 差	係 数	(秒)	(秒)		(秒)	偏 差	係 数	(秒)	(秒)		(秒)	偏 差	係 数
平成 19 年度	男 児			6.5	1.0	15.6	4.1	19.2		6.2	0.6	10.4	5.0	11.8		6.3	0.8	13.2
	女 児			6.5	0.6	8.6	5.4	9.0		6.4	0.6	9.9	5.1	10.5		6.4	0.6	9.4

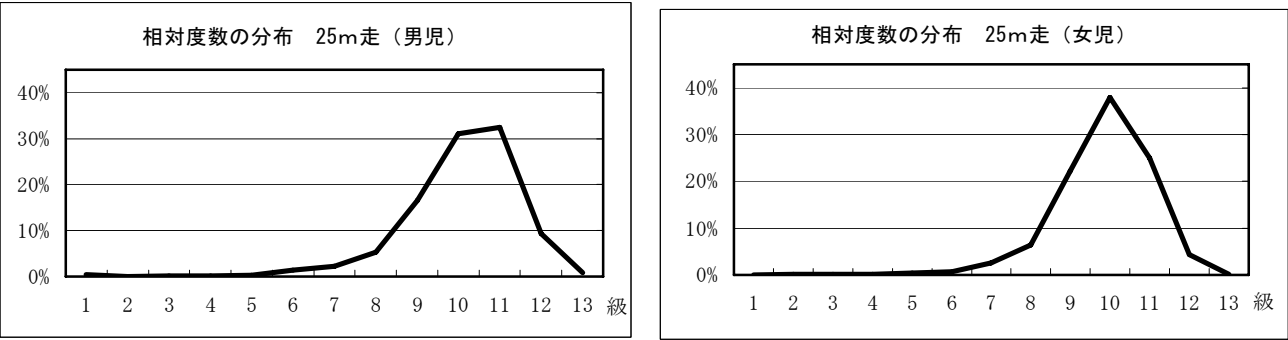
《変動係数》

変動係数は平均値に対する標準偏差の割合を表すもので、相対的な散らばりを表す指標である。標準偏差は測定単位の影響を受けるので単位の異なる資料の比較ができないが、変動係数は単位が異なる資料の散らばりの度合いを相互に比較できる。この値が大きいくほど平均の周りにおける資料の散らばりの度合いが大きい。

＜度数の分布＞

男児・女児とも過去の度数の分布と同じ形状を示している。また、男児は平均値（10 級）より高い級（11 級）の割合が高い。（図 1）

図 1



1 級 10.6～ 2 級 10.1～10.5（代表値 10.3） 3 級 9.6～10.0（代表値 9.8） 4 級 9.1～9.5（代表値 9.3）
5 級 8.6～ 9.0（代表値 8.8） 6 級 8.1～8.5（代表値 8.3） 7 級 7.6～8.0（代表値 7.8） 8 級 7.1～ 7.5（代表値 7.3）
9 級 6.6～ 7.0（代表値 6.8） 10 級 6.1～6.5（代表値 6.3） 11 級 5.6～6.0（代表値 5.8） 12 級 5.1～ 5.5（代表値 5.3）
13 級 0～5.0（代表値 2.5） （単位：秒）

＜過去 9 回の調査との比較＞

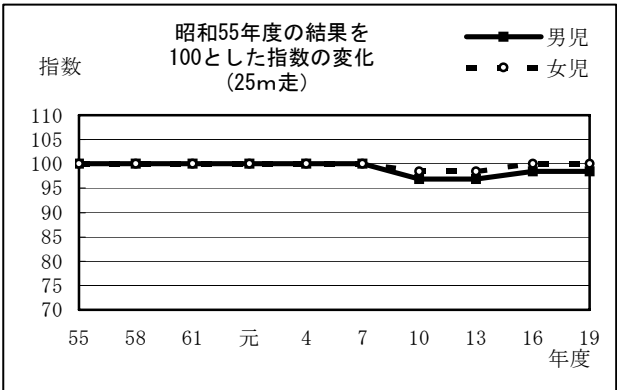
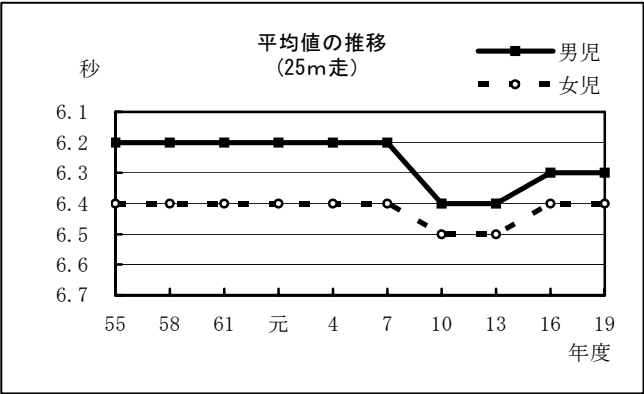
平均値は、平成 10 年度に男児が 6.4 秒に、女児が 6.5 秒に下がり横ばいであったが、平成 16 年度に男児・女児ともに平成 13 年度を 0.1 秒上回った。今回の調査では、男児・女児とも平成 16 年度と同じ値であった。（図 2）

昭和 55 年度の結果を 100 とした指数変化では（図 3）、昭和 55 年度から平成 7 年度まで男児・女児ともに変化はなかったが、平成 10 年度から男児・女児ともに低下傾向である。前回の調査

で女児の指数は昭和55年度の値100に戻し、男児の指数も上昇する傾向にある。今回の調査では、男子が98.4、女児が100で、男児・女児ともに前回の調査と同じ値であった。

図2

図3

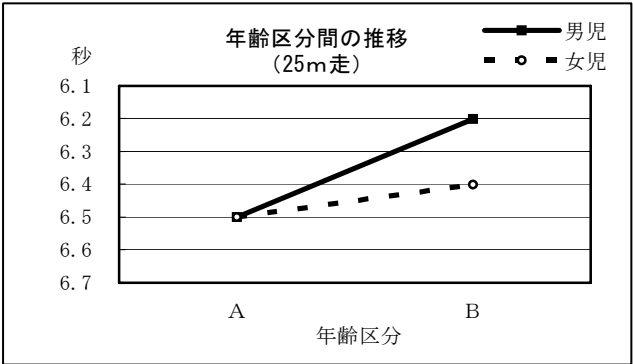


＜年齢区分間の運動能力の比較＞

年齢区分AとBの差は、男児は0.3秒、女児は0.1秒になっている。（図4）

また、男児の方が女児より年齢区分間の差が大きい。

図4



(2) 立ち幅跳び

＜調査結果の概要＞

年齢区分Aでは、平均値が男児は103.1cm、女児は97.3cmである。また、年齢区分Bでは、平均値が男児は110.5cm、女児は100.6cmである。全体の平均は、男児が107.5cm、女児が99.3cmである。（表4）

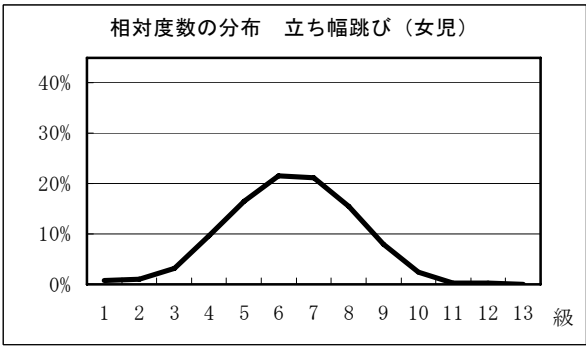
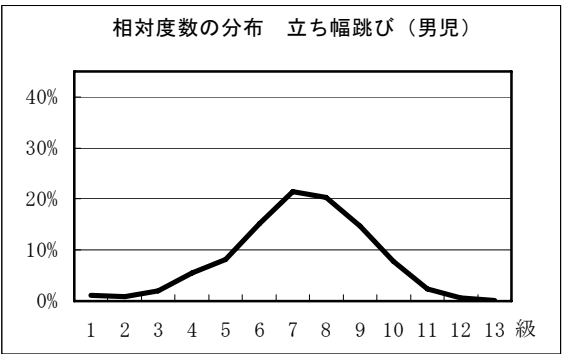
表4

年度	性別	年齢区分A (5歳6ヶ月～5歳11ヶ月)					年齢区分B (6歳0ヶ月～6歳5ヶ月)					全 体		
		平 均 (cm)	標 準 偏 差	変 動 係 数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	平 均 (cm)	標 準 偏 差	変 動 係 数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	平 均 (cm)	標 準 偏 差	変 動 係 数
平成 19 年度	男 児	103.1	19.4	18.8	158.0	10.0	110.5	19.8	17.9	162.0	31.0	107.5	20.0	18.6
	女 児	97.3	17.0	17.4	142.0	10.0	100.6	17.7	17.6	158.0	32.0	99.3	17.5	17.6

＜度数の分布＞

男児・女児とも過去の度数の分布と同じ形状を示している。（図5）

図5



1 級 0～50 (代表値 25) 2 級 51～60 (代表値 55) 3 級 61～70 (代表値 65) 4 級 71～80 (代表値 75)
5 級 81～90 (代表値 85) 6 級 91～100 (代表値 95) 7 級 101～110 (代表値 105) 8 級 111～120 (代表値 115)
9 級 121～130 (代表値 125) 10 級 131～140 (代表値 135) 11 級 141～150 (代表値 145) 12 級 151～160 (代表値 155)
13 級 161～ (代表値 165)

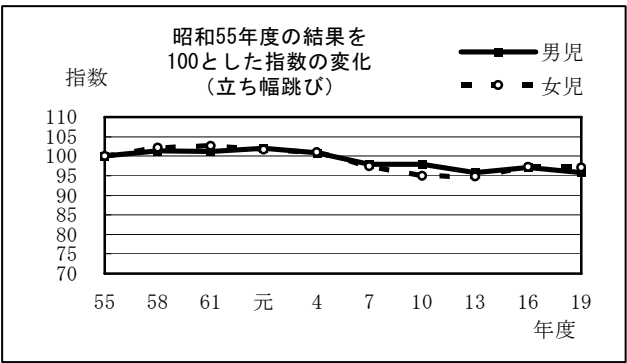
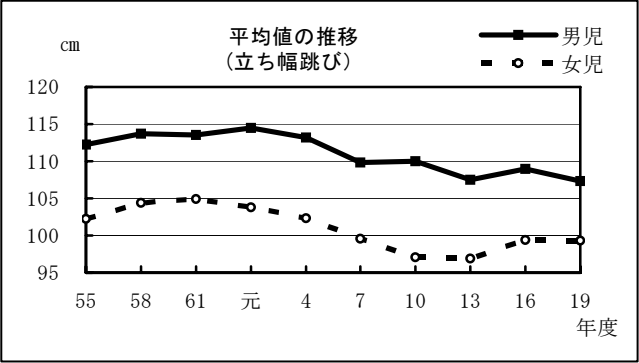
(単位：cm)

＜過去 9 回の調査との比較＞

平均値は男児が平成元年度に最も大きい値を示したが、その後低下と上昇を繰り返し、今回は平成 13 年度と同じ最も低い値 107.5cm であった。女児は昭和 61 年度まで上がった後、低下傾向が見られた。平成 10 年度を境に前回調査からは上昇傾向が見られていたが、今回再び下降した。(図 6) また、昭和 55 年度の結果を 100 とした指数変化では(図 7)、男児は平成元年度が最も大きくその後低下する傾向にある。今回の調査でも指数は 95.8 で前回の 97.1 から低下している。女児は昭和 61 年度までは上昇傾向であったが平成元年度からは低下傾向にある。前回の調査では指数 97.3 と回復したが、今回の調査では指数 97.2 と前回とほぼ同じ値であった。

図 6

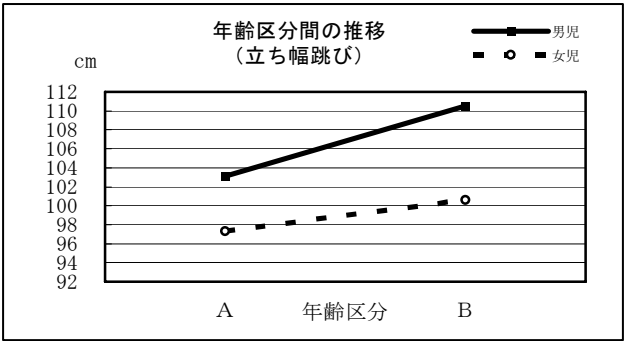
図 7



＜年齢区分間の運動能力の比較＞

図 8

年齢区分 A と B の差は、男児は 7.4cm、女児は 3.3cm になっている。(図 8)
今回の調査では、女児の年齢区分間の差は過去最も小さい値となってる。



(3) ソフトボール投げ

＜調査結果の概要＞

年齢区分 A では、平均値が男児は 5.7m、女児は 3.9m である。年齢区分 B では、平均値が男児は 6.7m、女児は 4.6m である。全体の平均では、男児が 6.3m、女児が 4.3m である。(表 5)

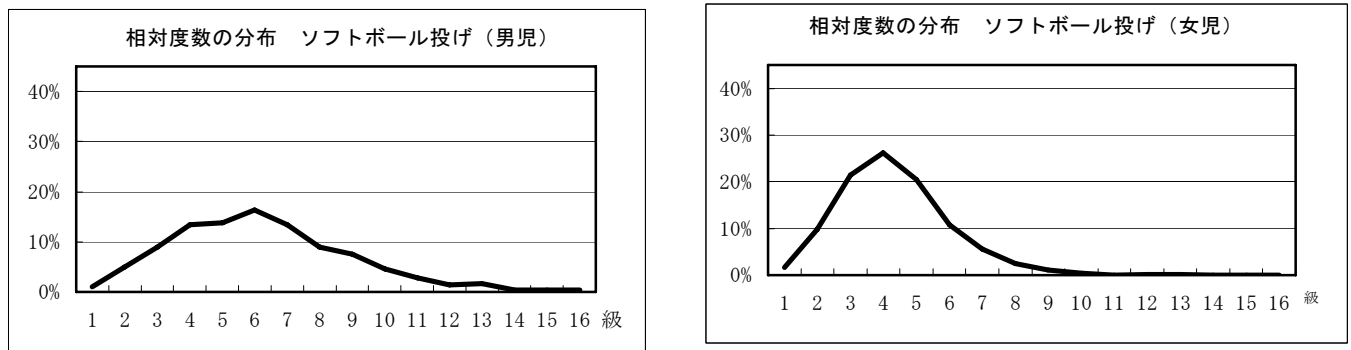
表 5

年 度	年 齢 性 別	年齢区分 A (5歳6ヶ月～5歳11ヶ月)					年齢区分 B (6歳0ヶ月～6歳5ヶ月)					全 体		
		平 均	標 準	変 動	最高値	最低値	平 均	標 準	変 動	最高値	最低値	平 均	標 準	変 動
		(m)	偏 差	係 数	(m)	(m)	(m)	偏 差	係 数	(m)	(m)	(m)	偏 差	係 数
平成 19 年度	男 児	5.7	2.6	45.9	17.0	1.0	6.7	2.7	40.8	18.0	1.0	6.3	2.7	43.0
	女 児	3.9	1.4	36.4	10.0	1.0	4.6	1.7	37.6	13.0	1.0	4.3	1.7	38.4

＜度数の分布＞

男児の度数の分布では、女児と比べて値の広がりが大きく、5級・6級で割合が低くなる傾向が見られる。この種目は、変動係数等をみても個人差が大きい種目といえる。（図9）

図9



1級 0～1.0（代表値 0.5） 2級 1.1～2.0（代表値 1.5） 3級 2.1～3.0（代表値 2.5） 4級 3.1～4.0（代表値 3.5）
 5級 4.1～5.0（代表値 4.5） 6級 5.1～6.0（代表値 5.5） 7級 6.1～7.0（代表値 6.5） 8級 7.1～8.0（代表値 7.5）
 9級 8.1～9.0（代表値 8.5） 10級 9.1～10.0（代表値 9.5） 11級 10.1～11.0（代表値 10.5） 12級 11.1～12.0（代表値 11.5）
 13級 12.1～13.0（代表値 12.5） 14級 13.1～14.0（代表値 13.5） 15級 14.1～15.0（代表値 14.5） 16級 15.1～
 （単位：m）

＜過去9回の調査との比較＞

平均値は、男児が平成4年度の値7.1mから平成7年度の値6.5mに0.6mと下がった後、平成10年度の値が6.6mと平成7年度の値を上回ったときを除き、その後は低下傾向にある。今回の調査でも、平成13年度の値6.3mと同じ値であり、低下傾向は依然続いている。女児は昭和61年度が最も高い値を示したが、平成元年度の調査からは低下傾向にある。今回の調査では、前回と同じ4.3mであり、依然低い水準にとどまっている。（図10）

また、昭和55年度の結果を100とした指数変化では（図11）、男児は昭和55年度の調査から平成7年度の調査まで値が低下し、平成10年度の調査でわずかに上がったが今回の調査では平成13年度と同様に最も低い値となった。女児は昭和61年度に最も値が大きくなったが、平成元年度と平成10年度に最も低い値を示した後、平成13年度を除いて低下する傾向にある。今回の調査では前回よりもやや値が上がったが、依然として低位な値で推移している。

図10

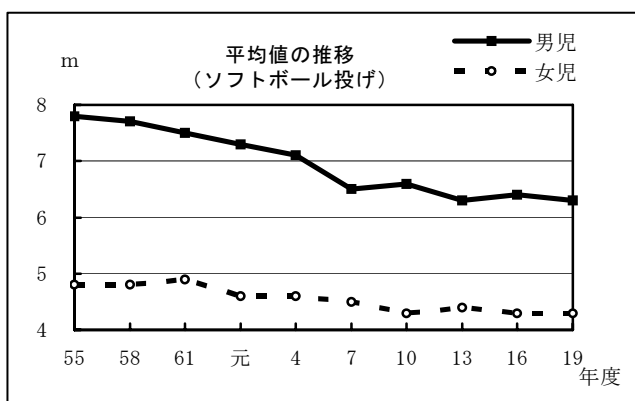
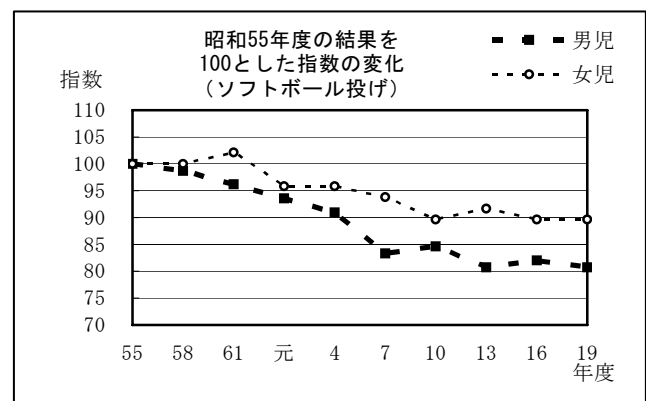


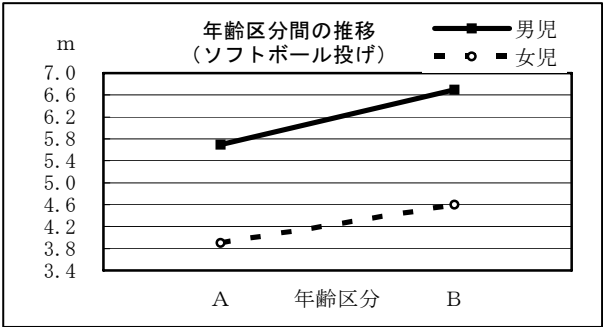
図11



＜年齢区分間の運動能力の比較＞

図 12

年齢区分間 A と B の値の差は、男児は 1.0m、女児は 0.7m になっている。（図 12）



(4) 体支持持続時間

＜調査結果の概要＞

年齢区分 A では、平均値が男児は 40.3 秒、女児は 45.2 秒である。また、年齢区分 B では平均値が男児は 50.9 秒、女児は 50.1 秒である。全体の平均では、男児が 46.6 秒、女児が 48.1 秒である。（表 6）

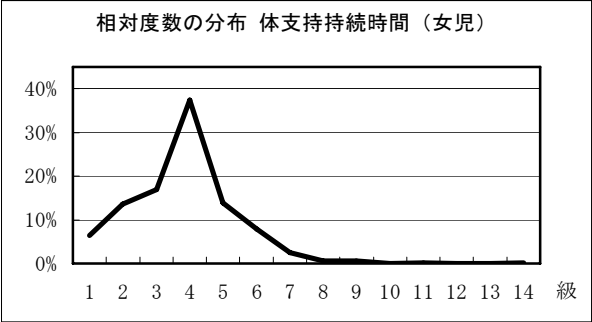
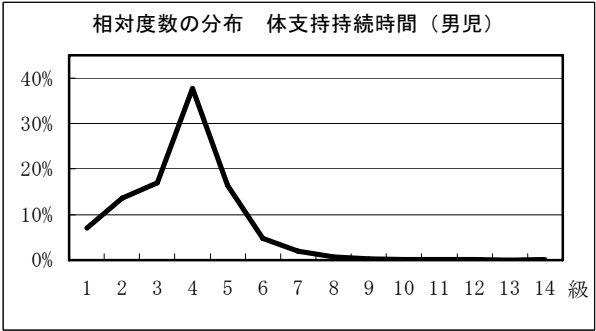
表 6

年 度	年 齢 区 分 項 目 性 別	年齢区分 A (5歳6ヶ月～5歳11ヶ月)					年齢区分 B (6歳0ヶ月～6歳5ヶ月)					全 体		
		平 均	標 準	変 動	最高値	最低値	平 均	標 準	変 動	最高値	最低値	平 均	標 準	変 動
		(秒)	偏 差	係 数	(秒)	(秒)	(秒)	偏 差	係 数	(秒)	(秒)	(秒)	偏 差	係 数
平成 19 年度	男 児	40.3	31.7	78.7	378.0	1.0	50.9	36.4	71.4	295.0	1.0	46.6	34.9	74.9
	女 児	45.2	33.8	74.6	256.0	1.0	50.1	40.4	80.7	491.0	1.0	48.1	37.9	78.8

＜度数の分布＞

男児・女児とも過去の度数分布と同じように平均値に値が集中し、とがった形状をなしている。変動係数も大きく個人差が大きい種目といえる。（図 13）

図 13



1 級 0～10 （代表値 5） 2 級 11～20 （代表値 15） 3 級 21～30 （代表値 25） 4 級 31～60 （代表値 45）
5 級 61～90 （代表値 75） 6 級 91～120 （代表値 105） 7 級 121～150 （代表値 135） 8 級 151～180 （代表値 165）
9 級 181～210（代表値 195） 10 級 211～240（代表値 225） 11 級 241～270（代表値 255） 12 級 271～300（代表値 285）
13 級 301～330 （代表値 315） 14 級 331～ （単位：秒）

＜過去 9 回の調査との比較＞

平均値は、昭和 55 年度から平成 10 年度にかけて男児が 32.2 秒、女児が 30.7 秒低下している。その後、平成 10 年度から男児・女児ともに測定時間が 50 秒前後を推移しているが、今回の調査では、男児 46.6 秒、女児 48.1 秒と、ともに前回の調査を下回っている。（図 14）

昭和 55 年度の結果を 100 とした指数変化では、男児は昭和 55 年度から平成 10 年度にかけて低下し、平成 13 年度に値が一度上がったものの、その後は低下する傾向にある。

今回の調査では57.6と過去最も低い値であった。女児も男児と同じ傾向にあり、前回に値が回復したが今回の調査は、60.4と前回よりわずかであるが低い値となった。（図15）

図14

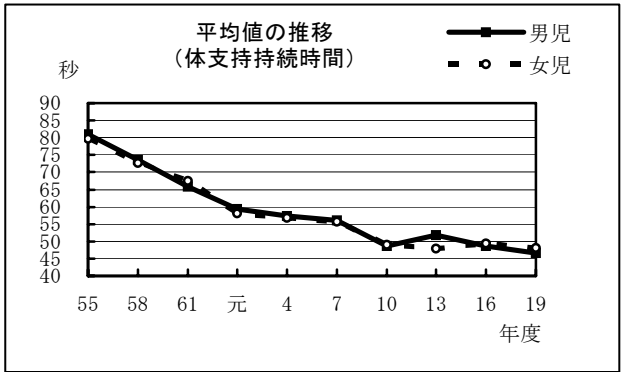
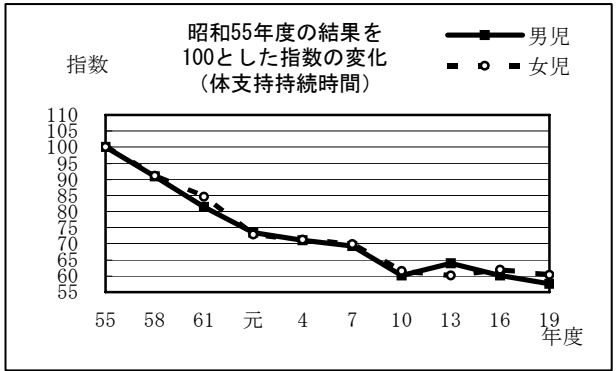


図15

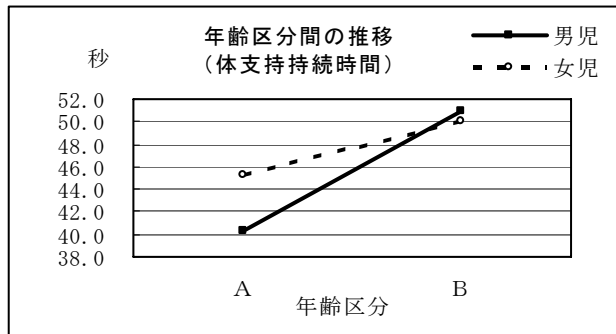


＜年齢区分間の運動能力の比較＞

図16

年齢区分AとBの差は、男児は10.6秒、女児は4.9秒と値が大きくなっている。（図16）

この種目では、年齢区分Aでは女児の方が男児より高い値であり、年齢区分Bで男児と女児の値が逆転している。



(5) 両足連続跳び越し

＜調査結果の概要＞

年齢区分Aでは、平均値が男児は5.8秒、女児は5.6秒である。また、年齢区分Bでは平均値が男児は5.4秒、女児は5.4秒である。全体の平均では、男児が5.6秒、女児が5.5秒である。（表7）

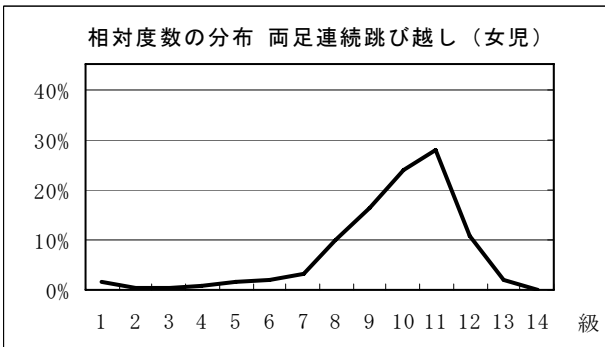
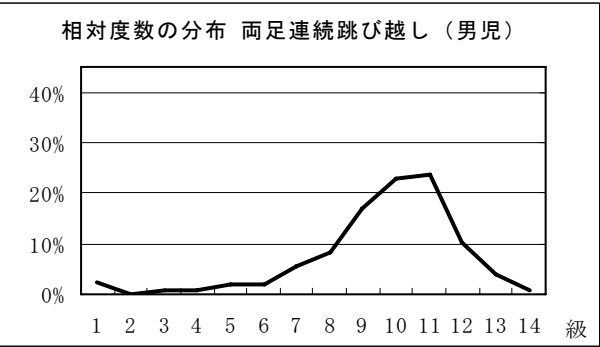
表7

年 齢 年 度 性 別		年 齢 区 分 A (5歳6ヶ月～5歳11ヶ月)					年 齢 区 分 B (6歳0ヶ月～6歳5ヶ月)					全 体		
		平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数	最高値 (秒)	最低値 (秒)	平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数
平成 19 年度	男 児	5.8	1.6	27.6	3.6	16.8	5.4	1.3	24.5	3.2	21.0	5.6	1.5	26.1
	女 児	5.6	1.2	21.0	3.7	13.3	5.4	1.2	22.0	3.5	17.3	5.5	1.2	21.6

＜度数の分布＞

男児・女児とも過去の度数分布と同じ形状を示している。（図17）

図17



1 級 9.6～ 2 級 9.1～9.5 (代表値 9.3) 3 級 8.6～9.0 (代表値 8.8) 4 級 8.1～8.5 (代表値 8.3)
5 級 7.6～8.0 (代表値 7.8) 6 級 7.1～7.5 (代表値 7.3) 7 級 6.6～7.0 (代表値 6.8) 8 級 6.1～6.5 (代表値 6.3)
9 級 5.6～6.0 (代表値 5.8) 10 級 5.1～5.5 (代表値 5.3) 11 級 4.6～5.0 (代表値 4.8) 12 級 4.1～ 4.5 (代表値 4.3)
13 級 3.6～4.0 (代表値 3.8) 14 級 0～3.5 (代表値 1.8) (単位：秒)

＜過去 9 回の調査との比較＞

平均値は、男児は平成 16 年度の調査で平成 13 年度の値 5.4 秒から 5.7 秒へと下がった。今回の調査では値が 5.6 秒と 0.1 秒と上昇した。女児の値にはあまり変化が見られないが、今回の調査は、前回と同じ値であった。(図 18) また、昭和 55 年度の結果を 100 とした指数変化は、男児は昭和 55 年度から平成 13 年度までほぼ横ばいであり、前回の調査では 96.4 と低下したが、今回の調査では 98.2 とわずかに上昇した。女児は昭和 61 年度、平成元年度、平成 7 年度が指数 98.1 と同じ値であったが、その後、平成 13 年度から上昇傾向にある。今回の調査は指数 96.4 と前回と同じ値であった。(図 19)

図 18

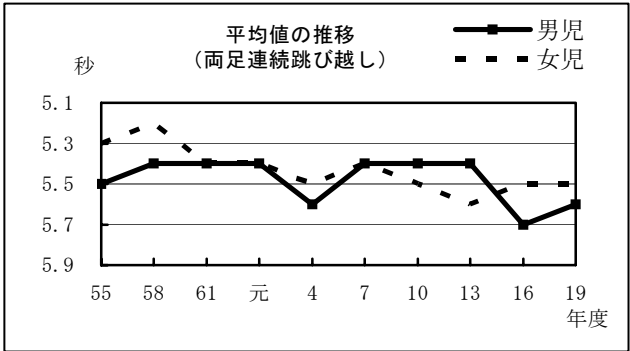
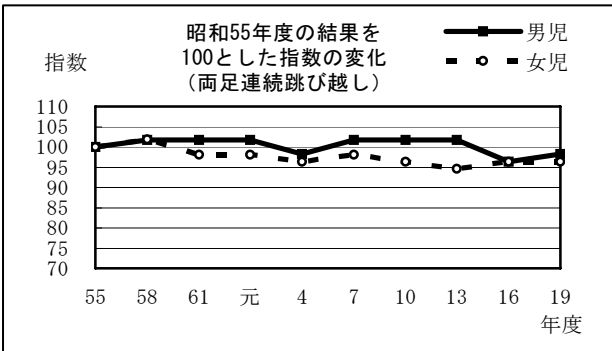


図 19

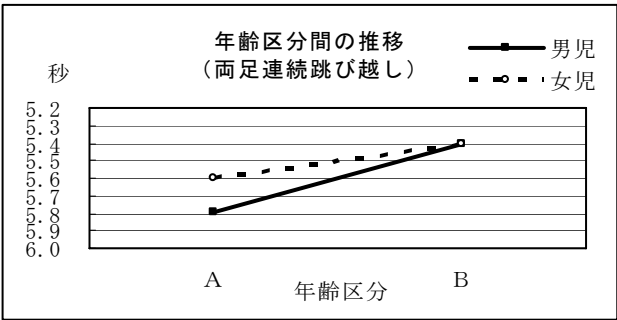


＜年齢区分間の運動能力の比較＞

年齢区分 A と B の差は、男児は 0.4 秒、女児は 0.2 秒となっている。(図 20)

また、年齢区分 A では前回の調査と同様に女児の値が男児よりも上回っている。

図 20



(6) 身長及び体重

① 身長

ア 平成 19 年度 調査結果

＜調査結果の概要＞

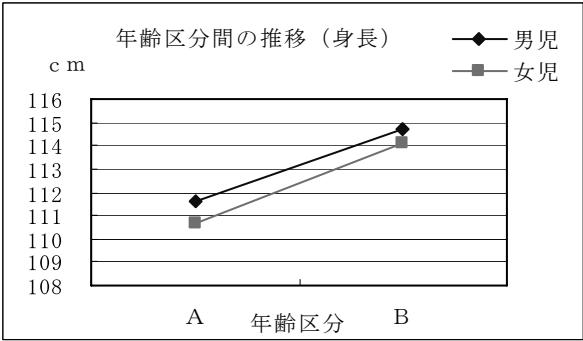
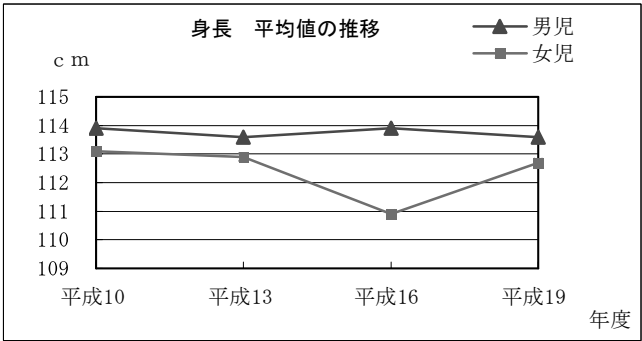
年齢区分 A では、平均値が男児は 111.8cm、女児は 110.5cm である。また、年齢区分 B では、平均値が男児は 114.9cm、女児は 114.1cm である。全体の平均は、男児が 113.6cm、女児が 112.7cm である。(表 8)

表 8

年齢 項目 性別		年齢区分 A (5歳6ヶ月～5歳11ヶ月)					年齢区分 B (6歳0ヶ月～6歳5ヶ月)					全 体		
		平 均 (cm)	標 準 偏 差	変 動 係 数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	平 均 (cm)	標 準 偏 差	変 動 係 数	最高値 (cm)	最低値 (cm)	平 均 (cm)	標 準 偏 差	変 動 係 数
平成 19 年度	男 児	111.8	4.6	4.1	128.3	89.3	114.9	5.0	4.3	132.2	98.1	113.6	5.1	4.5
	女 児	110.5	4.4	4.0	124.4	99.6	114.1	4.8	4.2	128.7	100.6	112.7	5.0	4.4

イ 平均値の推移（過去 4 回）

図 21 ウ 年齢区分間の比較（平成 19 年度） 図 22



身長平均値の推移では、平成 16 年度の調査を除き男児は 113cm 後半、女児は 113cm 前後と、平成 10 年度から大きく変化はしていない。今回の調査でも、男児は 113.6cm であり、女児は 112.7cm と過去と同様に平均的な値であった。（図 21）年齢区分間の比較では、男児が 3.1cm、女児が 3.6cm 値が大きくなっている。（図 22）

② 体重

ア 平成 19 年度 調査結果

＜調査結果の概要＞

年齢区分 A では、平均値が男児は 19.1kg、女児は 18.5kg である。また、年齢区分 B では、平均値が男児は 20.1kg、女児は 19.9kg である。全体の平均では、男児が 19.7kg、女児が 19.3kg である。（表 9）

表 9

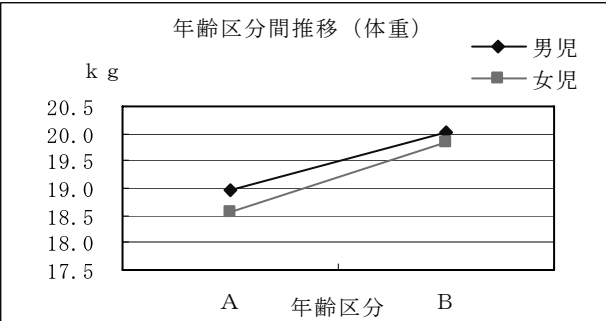
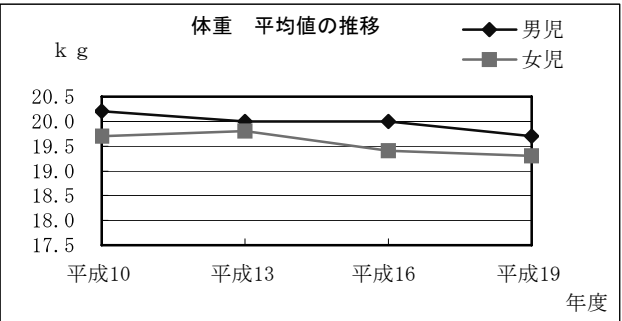
年度	性別	年齢区分 A (5歳6ヶ月～5歳11ヶ月)					年齢区分 B (6歳0ヶ月～6歳5ヶ月)					全 体		
		平 均	標 準	変 動	最高値	最低値	平 均	標 準	変 動	最高値	最低値	平 均	標 準	変 動
		(kg)	偏 差	係 数	(kg)	(kg)	(kg)	偏 差	係 数	(kg)	(kg)	(kg)	偏 差	係 数
平成 19 年度	男 児	19.1	2.7	14.1	38.0	11.6	20.1	3.2	15.8	47.6	13.0	19.7	3.0	15.4
	女 児	18.5	2.6	13.9	43.2	13.7	19.9	3.1	15.5	37.5	14.0	19.3	3.0	15.3

イ 平均値の推移

図 23

ウ 年齢区分間の比較

図 24



体重平均値の推移は、平成 10 年度の調査と比較して男児・女児ともに低下する傾向が見られる。男児は、今回の調査で平均値が 19.7kg と 20.0kg を下回っている。女児は、平成 13 年度に前回よりも増加したが、今回は 19.3kg と低下傾向が見られる。（図 23）年齢区分間の比較では、男児が 1.0kg、女児が 1.4kg と女児の方が体重の増加は大きい結果となっている。（図 24）

③ カウプ指数

表 10

年 度	年 齢 項目 性別	年齢区分 A (5歳6ヶ月～5歳11ヶ月)					年齢区分 B (6歳0ヶ月～6歳5ヶ月)					全 体		
		平 均	標 準 偏 差	変 動 係 数	最高値	最低値	平 均	標 準 偏 差	変 動 係 数	最高値	最低値	平 均	標 準 偏 差	変 動 係 数
平成 19 年度	男 児	15.2	1.4	9.3	23.6	12.2	15.1	1.5	10.2	29.9	12.1	15.2	1.5	9.8
	女 児	15.1	1.4	9.3	28.0	11.8	15.2	1.6	10.6	24.0	11.6	15.1	1.5	10.1

カウプ指数とは、発育の状況を示す指数の一つであり、身長と体重のつりあいを数値で示したものである。次の式が求めることができ、発育状態を「普通」とするのは、満 3、4、5 歳では 14.5 から 16.5 とされている。今回の調査結果は、男児、女児ともに発育状態が「普通」であることを示している。

$$\text{カウプ指数} = \{ \text{体重 (g)} \div \text{身長 (cm)} \times \text{身長 (cm)} \} \times 10$$

2 補助調査の結果と分析

(1) 運動能力に関する補助調査の内容

園児の運動遊びや健康・体力づくりにかかわる指導・援助の工夫等について、運動能力に関する補助調査を調査実施園に併せて実施した。特に、今後、各幼稚園で運動能力調査結果を比較したり、園児への指導・援助の工夫・改善を図ったりする上で参考となる資料を掲載した。

① 領域「健康」にかかわる指導の重点と指導・援助等における問題点等について

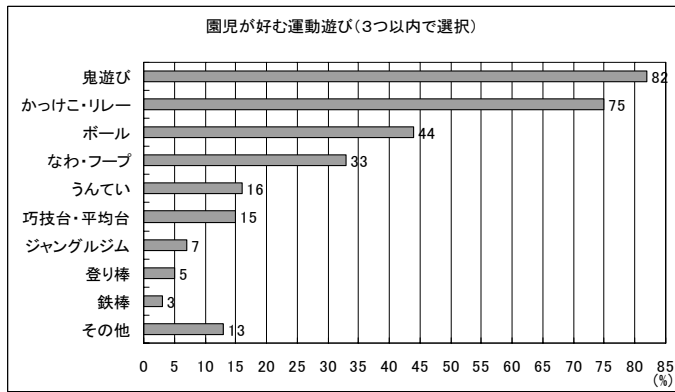
領域「健康」にかかわる指導の重点を記載内容から整理すると「十分に体を動かすこと」や「進んで運動すること」などを取り上げている幼稚園は、63 園（有効回答数）のうち 71%にあたる 45 園であった。また、「生活リズムを身に付けること」については 46%が、「先生や友達と楽しく食事をする事」などの食に関する活動についても指導の重点としている幼稚園が 16%あった。また、指導・援助等における問題点として以下の内容が挙げられた。

・遊ぶ場所が狭く、施設や設備が不足している。	(24%)
・園児の動きが以前と比べてぎこちなく感じる。また、転びやすくなっている。	(22%)
・園児が外で体を動かすことや運動の好き嫌いなど、個人差が大きくなっている。	(22%)
・基本的な生活習慣や生活リズムなどが定着していない園児が増えた。	(21%)
・偏食などの食生活のバランスが悪い園児が増えた。	(13%)
・新しい遊びに取り組めなかったり、すぐに諦めてしまったりする園児が増えた。	(8%)

また、問題点を解決するための取組みとして、運動や遊びに関することについては、伸び伸びと体を動かすことができる教材の開発や遊具の工夫、集団で体を動かしたくなる遊びの紹介や環境の構成などをすべての幼稚園で取り上げている。また、施設・設備に関する課題を補うために小学校や公園等の施設活用を積極的に図ることや徒歩遠足の実施など、運動や遊びの体験の拡充を図るうえでの取組みを挙げている。

② 園児が好む運動遊びについて

図 25



調査実施園には園児が好む運動遊びを3つ以内で選択回答してもらった。「鬼遊び」や「かけっこ・リレー」が多い理由として、鬼遊びは、「思い切り体を動せる」「ルールを発展・工夫できる」「逃げる時のスリルが味わえる」などが、「かけっこ・リレー」では、「運動会の種目にある」「力いっぱい取り組める」「チームで勝敗を競い、充実感が味わえる」などが挙げられた。

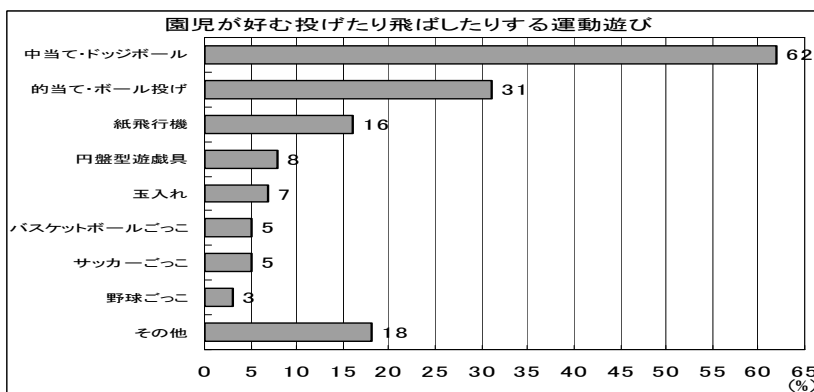
また、平成16年度の調査でも「鬼遊び」70%、「かけっこ等」60%として回答されている。その他の運動遊びの事例として、「竹馬」「ダンス」「綱渡り・綱登り」などが挙げられた。

③ 運動遊びに消極的な園児への指導・援助等について

外で体を動かすことや運動の好き嫌いについて園児の個人差が大きくなっていることが2-(1)-①でも問題点として挙げられている。運動遊びに消極的な園児への指導・援助の取り組み事例を2つ以内で回答してもらった結果、「一斉遊びの時間を計画的に設定する」などが61%、「楽しいイメージをもてるよう様々な場面で声をかけたり遊びを紹介したりする」などが41%、「必ずできるような運動遊びを盛り込み、できたときに認め励ます」などが30%となった。

具体的な事例として、「運動遊びをあまり好まない園児には、教師と一緒に付いて動き、戸外で遊ぶことの心地よさを味わわせる」「動物や忍者ごっこなどをするとき、遊びのイメージが膨らむよう音楽を流して取り組ませる」「固定遊具や縄とびなどではチャレンジカードを配り、できたときにシールなどを付けて認め励ます」などが挙げられていた。その他の事例として「親子体操」や「小学生との交流活動」など、人とのかかわりを多く設定した取り組みが見られた。

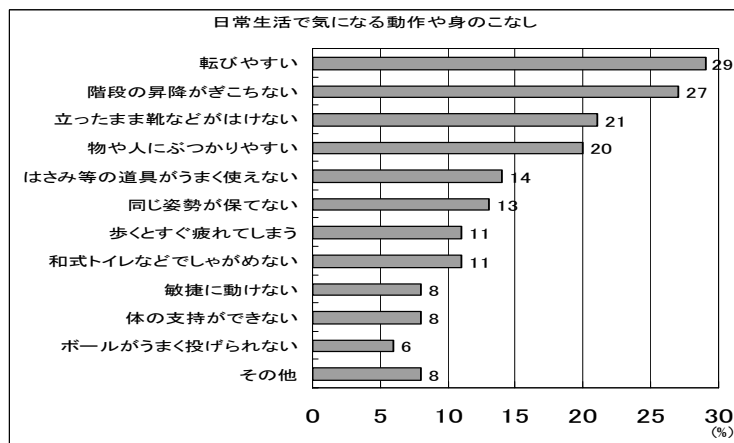
④ 園児が好む投げたり飛ばしたりする運動遊びについて 図 26



園児が好む投げたり飛ばしたりする運動遊びの取り組みについての回答を内容の面から整理した。集団で手軽に運動遊びができる「中当て・ドッジボール」62%、「的当て・ボール投げ」31%と数値が高く、各幼稚園では運動遊びの目的や園児の実態に応じてボールの色

や大きさ・硬さなどを工夫している。また、「中当て・ドッジボール」をしている園児の中にはボールを投げるより、ボールから逃げることを楽しんでいる場合もあり、ルールの工夫により園児に投げる体験を積ませるとともに、運動遊びへのかかわり方を教員が十分に観察し適切な援助をすることの重要性を挙げている幼稚園もあった。

⑤ 日常生活で気になる動作や身のこなしについて 図 27



園児の気になる動作や身のこなしについて、調査実施園で教員が感じていることを回答してもらい内容を整理した。回答からは日常生活における体験の不足、生活様式の多様化などに伴う課題の一つとして各幼稚園で受け止めている。その対応として、園児一人一人の動きを観察・分析することにより、「その動きを取り

入れた運動遊びを多くする」、「日常生活の中に様々な経験を取り入れる」、「家庭に協力を求めながら根気強く指導・援助する」などの取組みを通して改善を図っていることが回答されている。その他の事例として「スキップができない」、「高い所を極端に怖がる」、「ブランコに乗れない」などの事例も挙げられていた。

⑥ 登降園の手段の割合について 図 28

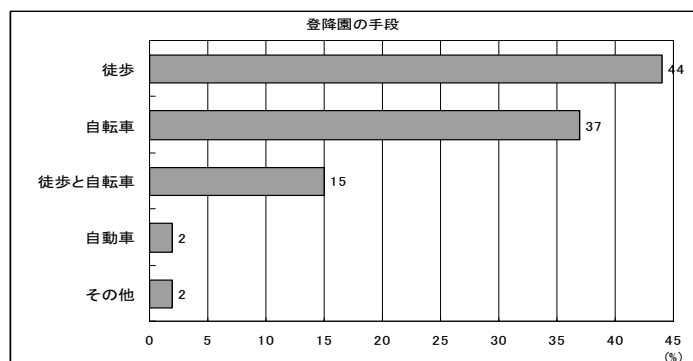


図 28 は各調査実施園の園児の登降園の手段の状況(割合)を示したものである。ほとんどの幼稚園で保護者に徒歩による登降園を促しており、「徒歩で通園する園児が増えている」という事例や「冬になると起床が遅くなるため、自転車を使用する割合が増える」「小学校入学前に徒歩通園が増加する」など時期や季節によりわずかに割合が増減するという回答も挙げられた。

⑦ 小学校及び地域・保護者との連携

運動遊びや健康・体力づくりに関する小学校との連携に関しては、「運動会などに参加したり、合同の行事を開催したりしている」などの教育活動にかかわることが 28%、「校庭や体育館、プール等を借りている」などの施設・設備に活用にかかわることが 18%、また、「小学校の食育に関する研修会に保護者や教職員が参加している」などの研修にかかわることが 7%であった。従来より各幼稚園では小学校と連携した様々な取組みを行っているが、運動遊びや健康・体力づくりに関する小学校との連携の取組みは、十分でない等の回答が約半数があった。

また、運動遊びや健康・体力づくりに関する地域・保護者との連携では、「地域や保護者が主となって園児が体を動かすことのできる行事を開催する」38%、「園庭開放により園児が体を動かすことのできる環境の整備をしている」11%、「保育参観時には親子一緒に運動できる内容を工夫している」11%、「基本的な生活習慣や生活リズムの定着に協力を求めている」7%、「ダンスの講師やサッカーのコーチを定期的に招いて、指導を依頼している」5%、などが挙げられた。この他に、園児が思わず体を動かしたくなるようなターザンロープやアスレチックコースなどの施設や遊具を地域と保護者が協力して整備し、積極的に活用している幼稚園もあった。

IV 調査研究のまとめと今後の課題

1 調査研究のまとめ

園児の運動能力については、依然として低下傾向が見られた。特に男児・女児ともに「体支持持続時間」は、昭和55年度の値と比較して約60%の値まで低下している。

種目別調査結果から、男児は、「両足連続跳び越し」で前回の調査からわずかな上昇が見られたが、「25m走」を除いた3種目「立ち幅跳び」「ソフトボール投げ」「体支持持続時間」は前回より低下した。女児は、「立ち幅跳び」と「体支持持続時間」の2種目で前回の調査を下回ったが、その他の種目では変化がなかった。また、男児・女児ともに「ソフトボール投げ」と「体支持持続時間」は、標準偏差及び変動係数から個人差が大きい種目であることがわかる。

また、運動能力に関する補助調査については、園児の運動遊びと日ごろの動作や身のこなし等の状況などから、各幼稚園における指導・援助等の問題点や園児の運動遊びや健康・体力づくりにかかわる指導・援助等の工夫がわかる。園児の健康・体力づくりには、運動遊びの質や量を踏まえたバランスよい体験をさせることが重要であるため、園児に多様な経験をとおして自発的に運動遊びに取り組めるよう、各幼稚園の実態等に即した指導・援助の重点等を設定する必要がある。各幼稚園においては、調査結果を参考に園児の指導・援助等の一層の工夫・改善に活用していただきたい。

2 「運動遊び」の充実に向けて

各幼稚園では、園児の興味・関心・意欲をはぐくむ運動遊びの工夫が継続的になされ、健康・体力づくりのための意図的・計画的な指導・援助が図られている。しかし、日常生活における園児の動作や身のこなしをみると「転びやすい」「体の支持ができない」「ボールがうまく投げられない」等、園児の運動能力の低下にかかわる要素も見受けられる。特に、運動能力調査から「ソフトボール投げ」や「体支持持続時間」など、経年的に低下傾向が続く種目については、園児の体験の違いや施設・設備が十分でないことなどから生じる能力差が大きいと感じている回答が多かった。そこで、集団とのかかわりを通して園児の興味・関心・意欲をはぐくむ運動遊びの充実に向けて「投げる」と「支える」といった視点に立った幼稚園での運動遊びの取組事例について紹介する。

(1) 園児の興味・関心・意欲をはぐくむ「投げる」ことにかかわる運動遊びの事例

「投げる」ことにかかわる運動遊びでは、「ドッジボール」や「的あて」等が、園児の好む運動遊びの上位に挙げられている。

都内公立幼稚園で行われている、次ページに挙げたような取組みの事例からも分かるように「ボールへの抵抗感をなくすこと」、「挑戦する意欲を刺激すること」、「繰り返し取り組むことで自信を付けさせること」「友達と競わせること」「園児の主体性を引き出すこと」など、運動遊びを意図的・計画的に工夫する試みがなされている。

また、専門家等による指導を取り入れて園児の興味・関心を高める運動遊びを効果的に実施している幼稚園もあった。

○いろいろな種類のボールを用意し、園庭の出入口など、園児の目に付きやすい場所に置くことによって園児のボール遊びをする機会が増えた。また、ドッジボールでは、コートやボールの種類、全員が外野や内野を経験するなどルールを工夫することによって、園児がボールの投げ方や扱い方がうまくなり、チームで競う楽しさや友達と一緒に体を動かす心地よさを味わうことができるようになった。

○テニスボールを使った「キャッチボール」では園児自らがカラーコーンを逆さにしたり、2人組でたらいを使いキャッチしたりするなどルールの工夫をすることにより投げる動作について距離やねらった的に投げる技能などの上達も見られた。また、領域「表現」とも関連させ、「傘用ビニールカバーの風船飛ばし」「牛乳パックのブーメラン投げ」「パラシュート飛ばし」「封筒ロケット」など、園児が作ったものを運動遊びに取り入れる工夫を行っている。

(2) 園児の興味・関心・意欲をはぐくむ「支える」ことにかかわる運動遊びの事例

次に「支える」ことにかかわる運動遊びでは、ロープや固定遊具等を使っている事例が多く見られた。都内の公立幼稚園では次のような取組みも行われている。

○木々につなげた「ロープアスレチック」「ターザンロープ」等、魅力ある遊具を配置し、全身を使って「ぶら下がる」「渡る」といった平衡感覚等も養えるように遊びの工夫をしている。また、壁際にタイヤを複数下げて、園児が乗って渡っていくアスレチックのような遊びができるように環境を整備した。最初のうちは、教師の助けを借りながらタイヤを渡っているが、次第にコツを覚え、その後は自分たちでルールをつくって遊びを発展させるようになった。

○園児の遊びに広がりが出るように園児の興味・関心に応じてうんていや鉄棒の使い方に工夫を凝らすことで、園児の興味・関心が高まり、ぶら下がったり、登ったりする運動遊びを楽しむようになった。また、迷路やジャンケン遊びのコースをつくるために、飲み物のケースや平均台、タイヤなどを園児に運ばせて友達と一緒にコースの作り方や遊び方を考えさせるとともに、意図的に物を運んだり持ち上げたりする体験も積ませている。

このようにロープや固定遊具等の特性を生かした環境の構成を工夫することで、運動遊びを通して、つかまったり、押したり、引っぱったり、登ったりするなど、体を支えることにかかわる体験を積ませている事例が挙げられた。また、ジャングルジムや鉄棒などの固定遊具を活用して運動遊びの充実を図っていくことも重要である。

3 今後の課題

東京都児童・生徒体力・運動能力調査報告書からは小学生・中学生における運動能力の二極化傾向は進んでおり、年齢が上がるにつれて運動・スポーツの実施頻度が低い者や運動時間の短い者の割合が増える傾向にあることが示されている。今後は、発達や学びの連続性を踏まえた幼稚園教育の充実を図ることが一層求められており、小学校教育との連携や接続を踏まえた教育内容や方法についての研究や実践が必要となってくる。本調査研究においては、運動能力に関する調査を引き続き経年比較・分析するとともに、園児の遊びの質や量、指導・援助の在り方をはじめ、食育を含めた基本的生活習慣、小学校における運動能力などとの関係などについても併せて調査・分析等を行うことが必要であると考えられる。

《種目別調査結果の推移》

① 25m走・平均値等推移

年 度	年 齢 項目 性別	年 齢 区 分 A			年 齢 区 分 B			全 体		
		平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数	平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数	平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数
昭和 55 年度	男 児	6.3	0.5	7.9	6.1	0.6	9.8	6.2	0.6	9.7
	女 児	6.5	0.6	9.2	6.3	0.5	7.9	6.4	0.6	9.4
昭和 58 年度	男 児	6.3	0.6	9.5	6.1	0.5	8.2	6.2	0.6	9.7
	女 児	6.5	0.5	9.2	6.3	0.5	7.9	6.4	0.6	9.4
昭和 61 年度	男 児	6.3	0.5	7.9	6.1	0.5	8.2	6.2	0.5	8.1
	女 児	6.5	0.6	9.2	6.3	0.5	7.9	6.4	0.6	9.4
平成 元 年度	男 児	6.4	0.8	12.2	6.1	0.6	9.0	6.2	0.7	11.3
	女 児	6.5	0.6	9.6	6.3	0.6	9.3	6.4	0.6	9.4
平成 4 年度	男 児	6.3	0.6	9.1	6.1	0.5	8.8	6.2	0.6	9.7
	女 児	6.5	0.5	8.4	6.3	0.5	8.0	6.4	0.5	7.8
平成 7 年度	男 児	6.3	0.5	7.9	6.2	0.5	8.1	6.2	0.6	9.7
	女 児	6.5	0.6	9.2	6.3	0.5	7.9	6.4	0.5	7.8
平成 10 年度	男 児	6.5	0.7	10.8	6.3	0.7	11.1	6.4	0.7	10.9
	女 児	6.6	0.7	10.6	6.5	0.6	9.2	6.5	0.6	9.2
平成 13 年度	男 児	6.5	0.7	10.7	6.2	0.6	9.5	6.4	0.7	10.3
	女 児	6.6	0.6	8.9	6.5	1.0	14.7	6.5	0.8	12.7
平成 16 年度	男 児	6.5	0.8	12.5	6.2	0.7	10.6	6.3	0.7	11.7
	女 児	6.6	1.0	14.7	6.3	0.6	9.1	6.4	0.8	12.0
平成 19 年度	男 児	6.5	1.0	15.6	6.2	0.6	10.4	6.3	0.8	13.2
	女 児	6.5	0.6	8.6	6.4	0.6	9.9	6.4	0.6	9.4

② 立ち幅跳び・平均値等推移

年 度	年 齢 項目 性別	年 齢 区 分 A			年 齢 区 分 B			全 体		
		平 均 (cm)	標 準 偏 差	変 動 係 数	平 均 (cm)	標 準 偏 差	変 動 係 数	平 均 (cm)	標 準 偏 差	変 動 係 数
昭和 55 年度	男 児	108.1	16.5	15.3	114.8	17.5	15.2	112.2	17.4	15.5
	女 児	97.9	15.8	16.1	105.0	15.7	15.0	102.2	16.1	15.8
昭和 58 年度	男 児	109.8	17.4	15.8	117.3	16.8	14.3	113.7	17.5	15.4
	女 児	101.1	15.3	15.1	107.5	16.1	15.0	104.4	16.0	15.3
昭和 61 年度	男 児	109.4	16.6	15.2	116.4	17.3	14.9	113.5	17.4	15.3
	女 児	101.1	15.9	15.7	107.3	16.7	15.6	104.9	16.7	15.9
平成 元 年度	男 児	110.3	16.1	14.6	117.7	17.2	14.6	114.5	17.4	15.2
	女 児	100.0	16.7	16.7	106.2	16.2	15.3	103.8	16.8	16.2
平成 4 年度	男 児	108.4	17.2	15.9	116.5	17.5	15.1	113.2	17.7	15.6
	女 児	98.7	15.7	15.9	104.8	16.7	16.1	102.3	16.5	16.1
平成 7 年度	男 児	105.9	17.7	16.7	111.8	18.2	16.3	109.8	18.3	16.7
	女 児	96.1	17.7	18.4	101.3	16.9	16.7	99.6	17.2	17.3
平成 10 年度	男 児	105.4	18.9	17.9	113.0	18.9	16.7	110.0	19.8	18.0
	女 児	93.9	17.2	18.3	98.7	18.7	18.9	97.1	18.3	18.8
平成 13 年度	男 児	103.2	18.3	17.7	110.6	19.2	17.3	107.5	19.1	17.8
	女 児	94.0	17.2	18.3	99.0	17.1	17.3	96.9	17.3	17.9
平成 16 年度	男 児	104.0	18.8	18.0	112.4	18.7	16.7	109.0	19.2	17.6
	女 児	95.3	15.7	16.5	102.2	15.2	14.9	99.4	15.8	15.9
平成 19 年度	男 児	103.1	19.4	18.8	110.5	19.8	17.9	107.5	20.0	18.6
	女 児	97.3	17.0	17.4	100.6	17.7	17.6	99.3	17.5	17.6

③ ソフトボール投げ・平均値等推移

年 度	年 齢 項目 性別	年 齢 区 分 A			年 齢 区 分 B			全 体		
		平 均 (m)	標 準 偏 差	変 動 係 数	平 均 (m)	標 準 偏 差	変 動 係 数	平 均 (m)	標 準 偏 差	変 動 係 数
昭和 55 年度	男 児	7.0	2.5	35.7	8.5	3.1	36.5	7.8	2.9	37.2
	女 児	4.4	1.4	31.8	5.1	1.6	31.4	4.8	1.6	33.3
昭和 58 年度	男 児	7.0	2.7	38.6	8.3	3.1	37.3	7.7	3.0	39.0
	女 児	4.4	1.5	34.1	5.1	1.7	33.3	4.8	1.6	33.3
昭和 61 年度	男 児	6.8	2.4	35.3	8.1	2.8	34.9	7.5	2.7	36.0
	女 児	4.5	1.5	33.9	5.2	1.6	31.2	4.9	1.6	32.7
平成 元 年度	男 児	6.5	2.4	36.2	7.8	2.8	35.6	7.3	2.7	37.0
	女 児	4.2	1.5	35.0	4.8	1.6	33.0	4.6	1.6	34.8
平成 4 年度	男 児	6.3	2.4	38.9	7.7	2.9	37.3	7.1	2.8	39.4
	女 児	4.1	1.4	34.2	4.9	1.7	34.3	4.6	1.6	34.8
平成 7 年度	男 児	5.9	2.2	37.3	6.7	2.6	38.8	6.5	2.5	38.5
	女 児	4.2	1.3	31.0	4.6	1.5	32.6	4.5	1.5	33.3
平成 10 年度	男 児	6.1	2.2	36.1	6.9	2.8	40.6	6.6	2.6	39.4
	女 児	4.0	1.4	35.0	4.5	1.6	35.6	4.3	1.6	37.2
平成 13 年度	男 児	5.7	2.4	41.8	6.8	2.8	40.7	6.3	2.7	42.3
	女 児	4.0	1.4	33.7	4.7	1.5	33.0	4.4	1.5	34.2
平成 16 年度	男 児	5.7	2.3	39.6	6.8	2.9	42.6	6.4	2.7	42.5
	女 児	4.0	1.5	36.7	4.5	1.4	31.8	4.3	1.5	34.2
平成 19 年度	男 児	5.7	2.6	45.9	6.7	2.7	40.8	6.3	2.7	43.0
	女 児	3.9	1.4	36.4	4.6	1.7	37.6	4.3	1.7	38.4

④ 体支持持続時間・平均値等推移

年 度	年 齢 項目 性別	年 齢 区 分 A			年 齢 区 分 B			全 体		
		平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数	平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数	平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数
昭和 55 年度	男 児	72.2	48.6	67.3	86.5	62.6	72.4	80.9	58.0	71.7
	女 児	70.0	44.6	63.7	85.9	55.1	64.1	79.7	51.8	65.0
昭和 58 年度	男 児	69.3	50.1	72.3	77.8	50.3	64.7	73.6	50.4	68.5
	女 児	66.8	45.5	68.1	78.0	52.5	67.3	72.6	49.6	68.3
昭和 61 年度	男 児	61.7	40.6	65.8	68.9	43.2	62.7	65.9	42.6	64.6
	女 児	62.6	39.7	63.5	70.4	43.9	62.3	67.4	42.5	63.1
平成 元 年度	男 児	54.1	36.5	67.5	62.6	45.0	71.8	59.4	41.7	70.2
	女 児	54.1	36.3	67.1	59.9	38.0	63.4	58.1	37.8	65.1
平成 4 年度	男 児	50.0	34.6	69.1	63.4	47.6	75.1	57.4	41.9	73.0
	女 児	47.6	33.5	70.5	62.5	60.8	97.4	56.8	50.5	88.9
平成 7 年度	男 児	50.8	31.0	61.0	57.3	37.9	66.4	56.1	36.3	64.7
	女 児	50.9	36.0	70.7	58.7	37.8	64.3	55.7	37.3	67.0
平成 10 年度	男 児	41.7	26.5	63.5	51.4	34.1	66.3	48.7	34.3	70.4
	女 児	43.7	29.2	66.8	51.2	38.9	76.0	49.0	35.3	72.0
平成 13 年度	男 児	47.2	42.5	90.1	55.0	39.5	71.7	51.8	40.9	79.0
	女 児	42.6	27.7	65.0	51.7	36.9	71.3	47.9	33.7	70.3
平成 16 年度	男 児	45.0	34.2	76.1	51.1	34.8	68.0	48.6	34.7	71.3
	女 児	44.9	34.4	76.6	52.4	36.6	69.8	49.4	35.9	72.6
平成 19 年度	男 児	40.3	31.7	78.7	50.9	36.4	71.4	46.6	34.9	74.9
	女 児	45.2	33.8	74.6	50.1	40.4	80.7	48.1	37.9	78.8

⑤両足連続跳び越し・平均値等推移

年度	性別	年齢 項目	年齢区分A			年齢区分B			全 体		
			平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数	平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数	平 均 (秒)	標 準 偏 差	変 動 係 数
昭和 55 年度	男 児		5.6	1.3	23.2	5.3	1.1	20.8	5.5	1.2	21.8
	女 児		5.4	1.1	20.4	5.2	0.9	17.3	5.3	1.0	18.9
昭和 58 年度	男 児		5.5	1.4	25.5	5.2	1.0	19.2	5.4	1.2	22.2
	女 児		5.4	1.3	24.1	5.1	0.7	13.7	5.2	1.1	21.5
昭和 61 年度	男 児		5.6	1.5	26.9	5.3	1.3	24.9	5.4	1.4	25.9
	女 児		5.6	1.5	26.3	5.3	1.2	22.7	5.4	1.3	24.1
平成 元 年度	男 児		5.6	1.3	23.8	5.2	1.1	20.1	5.4	1.2	22.2
	女 児		5.5	1.1	20.2	5.3	0.9	17.7	5.4	1.0	18.5
平成 4 年度	男 児		5.8	1.7	29.0	5.4	1.4	26.1	5.6	1.5	26.8
	女 児		5.7	1.4	24.4	5.4	1.2	22.7	5.5	1.3	23.6
平成 7 年度	男 児		5.5	1.5	27.3	5.2	1.3	25.0	5.4	1.4	25.9
	女 児		5.5	1.2	21.8	5.3	1.0	18.9	5.4	1.1	20.4
平成 10 年度	男 児		5.7	1.7	29.8	5.3	1.3	24.5	5.4	1.5	27.8
	女 児		5.7	1.6	28.1	5.5	1.3	23.6	5.5	1.4	25.5
平成 13 年度	男 児		5.7	1.9	33.8	5.2	1.1	21.8	5.4	1.5	28.3
	女 児		5.7	1.6	28.8	5.5	1.7	30.4	5.6	1.7	29.6
平成 16 年度	男 児		5.7	1.9	32.4	5.6	2.9	52.0	5.7	2.5	44.6
	女 児		5.7	1.3	23.1	5.4	1.0	18.6	5.5	1.1	20.8
平成 19 年度	男 児		5.8	1.6	27.6	5.4	1.3	24.5	5.6	1.5	26.1
	女 児		5.6	1.2	21.0	5.4	1.2	22.0	5.5	1.2	21.6

《平成 19 年度「第 10 回 東京都公立幼稚園 5 歳児の運動能力調査」調査実施園》

千代田区立麴町幼稚園	墨田区立緑幼稚園	豊島区立南長崎幼稚園
千代田区立九段幼稚園	江東区立南陽幼稚園	豊島区立池袋幼稚園
千代田区立番町幼稚園	江東区立ひばり幼稚園	北区立ほりふな幼稚園
千代田区立富士見幼稚園	江東区立もみじ幼稚園	北区立さくらだ幼稚園
千代田区立お茶の水幼稚園	江東区立第五砂町幼稚園	北区立うめのき幼稚園
千代田区立千代田幼稚園	江東区立東砂幼稚園	荒川区立町屋幼稚園
千代田区立昌平幼稚園	品川区立城南幼稚園	練馬区立北大泉幼稚園
千代田区立いずみこども園	品川区立第一日野幼稚園	練馬区立光が丘わかば幼稚園
中央区立明石幼稚園	品川区立八潮わかば幼稚園	練馬区立光が丘さくら幼稚園
中央区立月島第一幼稚園	目黒区立ふどう幼稚園	足立区立鹿浜幼稚園
中央区立豊海幼稚園	大田区立松仙幼稚園	葛飾区立西小菅幼稚園
港区立中之町幼稚園	大田区立荻中幼稚園	葛飾区立東柴又幼稚園
港区立芝浦幼稚園	大田区立西六郷幼稚園	江戸川区立鹿本幼稚園
新宿区立市谷幼稚園	大田区立蒲田幼稚園	江戸川区立船堀幼稚園
新宿区立早稲田幼稚園	大田区立新宿幼稚園	江戸川区立小松川幼稚園
新宿区立東戸山幼稚園	世田谷区立多聞幼稚園	府中市立矢崎幼稚園
新宿区立西戸山幼稚園	世田谷区立松丘幼稚園	日野市立第五幼稚園
文京区立明化幼稚園	渋谷区立広尾幼稚園	日野市立第七幼稚園
文京区立後楽幼稚園	渋谷区立千駄谷幼稚園	東久留米市立上の原幼稚園
台東区立竹町幼稚園	中野区立みずのとう幼稚園	東久留米市立下里幼稚園
台東区立田原幼稚園	杉並区立成田西幼稚園	東久留米市立大道幼稚園
台東区立育英幼稚園	豊島区立西巢鴨幼稚園	